

エルサレムでのパウロの受難

使徒パウロはエルサレム教会の指導者たちの提案に従い、ユダヤ人キリスト者たちの誤解を解くために、またユダヤ人教会と異邦人教会の理解と一致のためにも、喜んで神殿のきよめの儀式に参加することに同意した。

ところが、事態は思わぬ方向へと展開していった。パウロがなおも神殿の中にいた時に、アジア州（おそらくエフェソ）から来たユダヤ人たちが、神殿の境内でパウロを見かけ、群集全体を煽動しはじめ、パウロを手にかけて叫び立てた。「イスラエルの人たち、手伝ってくれ。この男は、民と律法とこの場所を無視することを至るところで誰にでも教えている。その上、ギリシヤ人を境内に連れ込んで、この聖なる場所を汚してしまった」（28節）。

ユダヤ人にとってエルサレム神殿はもっとも神聖な場所であって、ユダヤ教への改宗者といえども、異邦人は宮の外庭には入れても、内庭には一步も入ることが許されていなかった。内庭と外庭との間には立て札が立っていてそこにはギリシヤ語とラテン語で「外国人は何人も、神殿とその境内を囲む妨さくの内部に侵入することは許されない。侵入して捕われた者は皆その結果として死刑の責任を負うべきである」と書かれていたという。

アジア州から来たユダヤ人らは、しばらく前にエフェソ人トロフィモがパウロと一緒に町を歩いていたのを見かけて、そのトロフィモをパウロが神殿の中に連れ込んだと誤解したのである。そこで、叫びを聞いて民衆がかけ集まり、神殿全体が騒然となった。怒り狂った群集はパウロを捕らえて神殿の外に引きずり出し、彼を打ちたたきリベンジしようとした。

神殿の西北部にアントニオ砦があり、神殿とは階段で結ばれていたが、そこには常時ローマ軍が駐留し神殿の警護に当たっていた。特に祭ともなるといつ暴動が起るかもしれないので、守備隊の数は増強されたという。もしその時、騒ぎを聞きつけて千人隊長に率いられたローマ軍が来なかったならばパウロは恐らく暴徒と化した群集の手によって殉教の死を遂げていたかもしれない。

兵士と共に現場に駆けつけた千人隊長はパウロを捕らえ、彼を二重の鎖で縛っておくように命じた上、パウロは何者か、また何をしたのかと尋ねた。しかし、群集がそれぞれ違ったことを叫び続けるために騒がしくて、確かなことが分からないので、彼はパウロを兵營に連れていくように命じた。

こうして使徒パウロは、ローマ軍の手に渡された。これを機にパウロの人生は大きく変わり、ローマ軍の捕囚としての受難が始まる。ユダヤ教当局者による度重なる死刑要求と、熱狂的民族主義者の刺客団による暗殺の危険にさらされながら、彼の身はエルサレムからカイサリアに移され、さらに帝国の首都ローマへと移されて行く。

彼がまだサウロと呼ばれ、教会の迫害者であった時、復活の主はダマスコ途上で彼に現れ、彼をとらえて、ご自身の器と変えられた。主はダマスコのアナニアに言われた、「行け。（サウロを恐れてはならない）あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である」と（使徒 9:15）。

パウロの身は、その後数年間、牢獄につながれることになるが、しかし、福音はつながれることはなかった。エルサレムにおいて、カイサリアにおいて、そしてローマにおいて、度重なる裁判の席上、ユダヤ人のみならず、異邦人の高官たちや王たち、役人や兵士たちに彼はキリストの福音を力強く伝える偉大な器となった。神の摂理の不思議さを感じる。